

体育授業に対する態度からみた基礎体力と顕在性不安

小川 貫 橋口泰武

日本大学

The fundamental physical fitness and manifest anxiety from the viewpoint of the attitude toward the physical education class

Kan OGAWA and Yasutake HASHIGUCHI

Nihon University

Abstract

The ultimate goal of this research is to obtain basic data for improving our physical education (PE) at the College of Science and Technology, Nihon University (CST). Questionnaire surveys of 179 male freshmen who entered CST in April, 1998 were conducted on attitude of pleasure in PE in their elementary schools, junior high schools and high schools. The following findings were found from an analysis of the relation between their attitude (Pleasure, Evaluation and Value) toward PE and their fundamental physical fitness or their manifest anxiety.

1) The fundamental physical fitness of the subjects is significantly worse than that of the average Japanese men in Back Strength, Grip Strength, Trunk Extension.

2) In the Value of PE, the high-favor group (H-group) has much more Body Mass Index than the low-favor group (L-group), but there is no difference between H-group and L-group in the Pleasure of PE.

3) In the Pleasure of PE, H-group has much better fundamental physical fitness than L-group, but there is no difference between H-group and L-group in the Value of PE.

4) In the attitude (Pleasure, Evaluation and Value) toward PE, L-group tends to be conscious of manifest anxiety more strongly than H-group.

1. はじめに

健康の維持・増進が身体的活動に負うところが大きく、また、体育・スポーツなどの身体活動が、パーソナリティーの形成にも影響を及ぼすと考えられている^{10, 18)}。しかし、近年、生活環境は急激に変化し、身体的な活動の場面を著しく減少させているようである。身体活動の機会を減少させることは、基礎体力のレベルを低下させることにつながると共に、心身の健康に対する維持、管理にも影響を及ぼすことになる。特に体育・スポーツ授業などで問題となる「運動遅滞」や「体育不振」者を生み出す一因と考えられる。このような状況は、生徒から大学生に至るまで共通の傾向とみられているようである^{1, 7, 9)}。

佐久本¹³⁾によれば「運動遅滞」とは、「一般的な運動技能が明らかに平均以下で、適応行動にも

何らかの問題を含む状態」であるとし、また宇都宮¹⁹⁾は「体育不振」とは、「肥満で体力の劣る者、調整力に問題のある者、運動嫌い」であると指摘している。徳永¹⁶⁾は、「体力低位学生は体育・スポーツに対する好意的態度が低く、課外のスポーツ活動も少なく、消極的性格の学生が多い」と指摘している。大学生を対象とした、筆者らの体育・スポーツ授業においても、徳永らが指摘している傾向をもつ学生の指導に苦慮している。

このように、いわゆる「運動遅滞」、「体育不振」、「体力低位」などの要因として、運動技能、体力、適応行動、性格、態度等との関連が指摘されている。特に、大学での保健体育が問われている²⁾現在、学生の身体的・体力的側面からの分析に加え、体育・スポーツ授業に対する態度などの心理的側面からの分析や考察が必要なことはいうまでもな

いことであろう。

小林⁶⁾の分析によれば、体育の授業に対する態度は「よろこび」「評価」「価値」の3要素で構成されており、それらは相互に関連し合っているが、これを構造的にとらえれば、「よろこび」から「評価」が生まれ、そして「価値観」が育つと指摘している。

本研究では、本学部における体育・スポーツ授業を効果的に真に「価値」のあるものにしていくための基礎資料を得るために、小林^{4,5)}の分析した体育授業に対する態度調査を用いて、新入生を対

象に、これまでの体育授業に対する「よろこび」「評価」「価値」の3因子について「好意的態度が高いとみられる者（以下、高好意群またはH群）」「中間とみられる者（以下、中好意群またはM群）」「好意的態度が低いとみられる者（以下、低好意群またはL群）」の3つの態度群に分類し、その好意度と入学時の基礎体力（身長、体重、体力診断テスト種目など）および心理的行動特性の一要因である顕在性不安との関係について分析を行なうものである。

表1. 体育授業に対する態度調査3因子30項目（小林 篤作成）

因子	因子構成項目
よろこび	1) 体育の授業の後は快い興奮が残る 2) 体育の授業は、心や身体の緊張をほぐしてくれる 3) 体育の授業は、生活にうおいを与えてくれる 4) 体育の授業は、私は喜びよりも苦しみが多い 5) 体育の授業では、いろいろな人といっしょに活動することが私はとても楽しい 6) 体育の授業は、友達をつくる場として高く評価することができる 7) 体育の授業は、積極的に汗を流し、身体を鍛えようとする意欲を起こさせる 8) 体育の授業では、われわれが自主的に考え行動することができる 9) 体育は教科の中で、最も価値のあるものの一つだ 10) 体育の授業時間は少なすぎる
評価	11) 体育の授業は、きびきびした動きのできる身体をつくる 12) 体育の授業は、体力づくりに役立つ 13) 体育の授業は、明朗活発な性格をつくることができる 14) 体育の授業は、たくましい精神力を養成する 15) 体育の授業は、どんなときでも正々堂々とがんばる習慣を身につけさせてくれる 16) 体育の授業は、お互い助け合い協力し合う習慣を身につけさせてくれる 17) 体育の授業では、運動のやり方だけでなく、その基本となる理論を学ぶことができる 18) 体育の授業では、私はときどき深い感動を感じる 19) 体育の授業は中途半端でまとまりがない 20) 体育の授業は、その場限りのもので、長く印象に残るといようなことはない
価値	21) 体育の授業でチームワークやチームプレーの発展を期待するのは無理だ 22) 体育授業では、能力の高いものやずうずうしいものがのさばる 23) 体育の授業で、体育をする喜びを味あうことのできるのの一部の人にすぎない 24) 体育の授業では、人間の利己主義がむきだしになる 25) 体育の授業の時の仲間は、その場限りの仲間すぎない 26) 体育の授業は、何も考えずに命令に従う人間をつくりやすい 27) 体育の授業は、理論と実践がかけ離れている 28) 体育の授業は、何をねらっているのかわからない 29) 体育の授業は、他の教科の先生に比べて先生の存在価値は低い 30) 野外で自由にスポーツができる条件があれば、体育は科目としてなくてもよい

2. 方法

1) 対象、調査期間、調査・測定項目等

- ①対象は、本学部1年生、男子179名を対象とした。
- ②調査・測定期間は、平成9年4月から5月にかけて調査・測定を行なった。
- ③体育授業に対する態度は、小林⁴⁾が分析し作成した、体育授業に対する調査項目(表1)を用い「よろこび」「評価」「価値」の3因子からなる30項目について、高校生活までに経験してきた教科体育の授業について調査を行なった。

④顕在性不安調査は、大村¹¹⁾が分析し作成した「顕在性不安」を用い、「身体的症候群」「集中力欠乏」「自信欠乏」「赤面恐怖」「睡眠障害」「取り越し苦労」の6因子、60項目について調査した。各因子ともに、0~10点で評価され、得点が高いほど顕在不安が高い傾向を示すとされている。

なお、今回用いた顕在性不安の6因子および主な因子構成項目抜粋は表2に示した。

⑤スポーツ活動の経験は、小学校から現在までに定期的に行なってきたスポーツ種目、活動状況等について調査した。

表2. 顕在性不安6因子と主な因子構成項目(大村政男作成)

因子	因子構成項目
身体的症候群	1) 皮膚に吹き出物ができることが多い 7) しばしば尿意をもよおす 13) 食欲不振なことが多い 19) 緊張すると汗がでがちである 25) なにかあるとすぐ体の調子が崩れてしまう
集中力欠乏	2) 興味があれこれと変わりやすい 8) じっとしていられないほど落ち着きを失うことがしばしばある 14) 一つのことに気持ちを集中できないほうである 20) 待たされるといらいらしてしまう 26) 物事にすぐ飽きてしまう
自信欠乏	3) 一度決めたことでも他人の意見ですぐ変わってしまう 9) 人生にいつも重荷を感じている 15) 自信がないために物事をあきらめてしまうことがよくある 21) 自分はまったく役に立たない人間だと思ふことが多い 27) 自分の無力さを切実に感じるが多い
赤面恐怖	4) なにかあるとすぐ頭がほてってくる 10) 人に会うのがおっくうなほうである 16) 大勢の人の前に立つと赤面しがちである 22) 恥ずかしがりやである 28) 異性に会うと赤面しがちである
睡眠障害	5) 睡眠薬を飲まないで眠れないこともある 11) うなされて目を覚ますことがときどきある 17) よく寝言を言うといわれる 23) 眠りが浅いような感じがする 29) ときどき眠れないほど興奮する
取り越し苦労	6) いつも緊張して生活している 12) なにかにつけて心配しがちである 18) 他の人よりも神経過敏である 24) 不幸な事が起こりはしないかとしばしば心配する 30) 他の人よりも神経質だと思う

⑥基礎体力の調査(測定)は、身長、体重は、4月の定期検診時のものを用いた。また、身長、体重を基にしてBody Mass Index¹⁵⁾を算出した。体力測定は、4月のスポーツ授業時に測定した文部省体力診断テスト7種目(「反復横とび」「垂直とび」「背筋力」「握力」「伏臥上体そらし」「立位体前屈」「踏み台昇降運動」)の測定結果を用いた。

2) 分析方法

①体育の授業に対する態度30項目は「1. はい、2. どちらでもない、3. いいえ」で回答してもらったが、逆転項目が含まれていたことから、授業に対して「好意的」と思われる回答には3点、「どちらともいえない」は2点、「非好意的」と思われる回答には1点を与えた。

②体育の授業に対する態度3因子の得点は各因子の構成項目(「よろこび」1~10項目、「評価」11~20項目、「価値」21~30項目)の得点を合計し、各因子それぞれの因子得点(各因子の得点は、最低10点

～最高30点である)とした。すなわち、各因子(「よろこび」「評価」「価値」とともに、高得点ほど体育授業に対して「好意的な態度が高い」と解釈できるようにした。

③体育の授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)3因子の各因子得点の平均値を算出し、その平均値を基にして、3因子それぞれについて「平均値±1/2標準偏差」の範囲内の得点者を「中好意群(M群)」とし、それより低得点者を「低好意群(L群)」、高得点者を「高好意群(H群)」の3群に分類した(表3)。

表3. 体育授業に対する態度因子3群の分類
n=179 (n)=各群の人数

態度因子		L群	M群	H群
よろこび	得点(n)	～22 (57)	23～26 (67)	27～ (55)
評価	得点(n)	～18 (51)	19～23 (75)	24～ (53)
価値	得点(n)	～21 (56)	22～24 (76)	25～ (47)

④体育授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)3因子の各因子の態度群(L群、M群、H群)によって基礎体力(身長、体重、BMIおよび体力診断テスト種目)の測定値および「顕在性不安」6因子の各因子得点をクロス集計した。

⑤平均値の差の検定は、文部省体育局と本学部学生間の基礎体力種目などの平均値についてはt検定を用いた。体育授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)3因子の各因子の態度群(L群、M群、H群)によって算出された基礎体力種目および顕在性不安の各因子などの平均値については、F検定を用い、有意なF値が得られた場合には、各群間毎の差についてt検定を行なった。いずれも危険率5%水準を有意限界とした。

3. 結果と考察

1) 本学部学生の基礎体力の実態について

表4は、今回対象とした本学部学生の身長、体重、BMIの平均値を示したものである。文部省体育局による同年代(18歳)の測定結果報告¹⁵⁾では、身長が171.14±5.61cm、体重が63.43±8.39kg、

BMIが21.7であった。文部省体育局と本学部学生(表4)間の形態項目平均値についてt検定の結果、身長、体重、BMIのいずれにも、有意な差はみられなかった。

表4. 対象学生の形態項目平均値(n=179)

	平均	標準偏差
身長(cm)	170.7	5.5
体重(kg)	63.0	9.2
BMI	21.6	2.7

表5は、今回対象とした本学部学生の体力(文部省体力診断テスト7種目)の平均値を示したものである。文部省体育局による同年代(18歳)の測定結果報告では、反復横とびが45.35±6.17回、垂直とびが59.85±7.85cm、背筋力が135.87±26.7kg、握力が45.08±6.89kg、伏臥上体そらしが54.73±9.28cm、立位体前屈が10.83±6.88cm、踏み台昇降運動が64.08±12.0であった。文部省体育局と本学部学生(表5)間の体力項目平均値についてt検定の結果、背筋力(p<0.001)、握力(p<0.001)および伏臥上体そらし(p<0.05)の3種目では、本学部学生の方が有意に低かった。すなわち、文部省体育局による同年代(18歳)に比べ今回対象とした本学部学生は、身長、体重、BMIなど形態的側面は同等であったが、筋力、柔軟性(伏臥上体そらし)などの体力は有意に劣る集団であった。著者⁸⁾らによる本学部学生の15年前の基礎体力(身長、体重および体力診断テスト種目)の測定結果と当時の文部省体育局の測定値の比較では、身長、体重は同等であったが、背筋力、握力、踏み台昇

表5. 対象学生の体力種目平均値(n=171)

種目	平均	標準偏差
反復横とび(回)	45.3	4.5
垂直とび(cm)	59.9	6.2
背筋力(kg)	127.2	24.8
握力(kg)	42.3	5.7
伏臥上体そらし(cm)	52.9	8.6
立位体前屈(cm)	11.2	7.2
踏み台昇降運動	63.2	12.1

表 6. 体育授業に対する態度「よろこび」の程度から見た形態項目平均値

(身長・体重・肥満率・BMIの群間比較)

形態項目	(平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定
	L群 (n=57)	M群 (n=67)	H群 (n=55)	LM	MH	LH	
身長(cm)	170.70±6.00	171.00±5.10	170.40±5.40	—	—	—	0.185 —
体重(kg)	63.00±10.20	62.60±7.50	63.50±9.90	—	—	—	0.186 —
BMI	21.60±5.40	21.40±2.20	21.80±2.90	—	—	—	0.444 —

表 7. 体育授業に対する態度「評価」の程度から見た形態項目平均値

(身長・体重・肥満率・BMIの群間比較)

形態項目	(平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定
	L群 (n=51)	M群 (n=75)	H群 (n=53)	LM	MH	LH	
身長(cm)	170.00±5.60	171.22±5.11	170.71±5.80	—	—	—	0.748 —
体重(kg)	61.60±8.40	63.50±9.24	64.19±9.56	—	—	—	1.700 —
BMI	21.11±2.42	21.62±2.66	22.00±2.87	—	—	—	1.420 —

表 8. 体育授業に対する態度「価値」の程度から見た形態項目平均値

(身長・体重・肥満率・BMIの群間比較)

形態項目	(平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定	※: p<0.05
	L群 (n=56)	M群 (n=76)	H群 (n=47)	LM	MH	LH		
身長(cm)	171.28±5.09	170.16±5.54	170.95±5.76	—	—	—	0.718 —	
体重(kg)	62.16±9.76	62.09±8.13	65.51±9.64	—	—	—	2.394 —	
BMI	21.12±2.59	21.42±2.41	22.40±3.00	—	※	※	3.198 ※	

降運動は明らかに劣っていたことを報告している。今回の対象学生も筋力が劣っていた。

2) 体育授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)からみた基礎体力

表6から体育授業の「よろこび」に対する3群(「高好意群(H群)」「中好意群(M群)」「低好意群(L群)」)間の形態項目の平均値についてF検定の結果、身長、体重、BMIともに、有意な差は認められなかった。

表7から体育授業の「評価」に対する3群(「高好意群(H群)」「中好意群(M群)」「低好意群(L群)」)間の形態項目の平均値についてF検定の結果、身長、体重、BMIともに有意な差は認められなかった。

表8から体育授業の「価値」に対する3群(「高好意群(H群)」「中好意群(M群)」「低好意群(L

群)」間の形態項目の平均値についてF検定の結果、身長、体重では有意な差は認められなかったが、BMIには有意(p<0.05)な差が認められた。BMIの各群間の平均値についてt検定の結果、L群とH群間(p<0.05)、M群とH群間(p<0.05)、に有意な差が認められた。すなわち、体育授業の「価値」に対して「高好意群(H群)」は「中好意群(M群)」や「低好意群(L群)」に比べBMIが高かった。

表9から体育授業の「よろこび」に対する3群(「高好意群(H群)」「中好意群(M群)」「低好意群(L群)」)間の体力種目の平均値についてF検定の結果、反復横とび(p<0.01)、垂直とび(p<0.001)、背筋力(p<0.05)、握力(p<0.01)、伏臥上体そらし(p<0.05)、踏み台昇降運動(p<0.01)の6種目に有意な差が認められた。有意なF値が得

られなかった立位体前屈を除く6種目の各群間の平均値についてt検定の結果、各種目のH群とL群間では、反復横とび(p<0.01)、垂直とび(p<0.001)、背筋力(p<0.05)、握力(p<0.01)、伏臥上体そらし(p<0.05)、踏み台昇降運動(p<0.01)の6種目に有意な差が認められた。H群とM群間で

は、背筋力(p<0.01)、踏み台昇降運動(p<0.05)の2種目に有意な差が認められた。すなわち、体育授業の「よろこび」に対して「高好意群(H群)」は「低好意群(L群)」に比べ敏捷性、瞬発力、筋力(背筋力、握力)、柔軟性(伏臥上体そらし)および持久力が優れ、「中好意群(M群)」に比べ背

表9. 体育授業に対する態度「よろこび」の程度から見た体力種目平均値の比較

形態項目	(体力診断テスト7種目の群間比較)			(平均±標準偏差)			群間の有意差		
	L群 (n=53)	M群 (n=65)	H群 (n=53)	LM	MH	LH	F検定		
反復横とび(回)	43.50±4.37	46.05±4.51	46.08±3.88	※※	—	※※	6.566 ※※		
垂直とび(cm)	56.80±5.69	61.23±5.61	61.34±6.20	※※※	—	※※※	10.633※※※		
背筋力(kg)	124.07±27.81	123.65±21.49	134.78±23.71	—	※※	※	3.652 ※		
握力(kg)	40.11±5.71	42.81±5.15	43.81±5.79	※※	—	※※	6.281 ※※		
伏臥上体そらし(cm)	50.37±8.58	54.04±8.52	53.97±8.18	※	—	※	3.357 ※		
立位体前屈(cm)	11.19±8.27	10.50±6.99	12.11±6.17	—	—	—	0.726 —		
踏み台昇降運動	59.75±11.99	62.15±10.80	67.81±12.75	—	※	※※	6.600 ※※		

※:p<0.05 ※※:p<0.01 ※※※:p<0.001

表10. 体育授業に対する態度「評価」の程度から見た体力種目平均値の比較

形態項目	(体力診断テスト7種目の群間比較)			(平均±標準偏差)			群間の有意差		
	L群 (n=49)	M群 (n=70)	H群 (n=52)	LM	MH	LH	F検定		
反復横とび(回)	45.12±3.99	45.36±4.53	45.27±4.62	—	—	—	0.040 —		
垂直とび(cm)	58.51±5.45	60.39±6.42	60.52±6.30	—	—	—	1.720 —		
背筋力(kg)	124.43±24.19	126.78±25.51	130.48±24.02	—	—	—	0.762 —		
握力(kg)	40.66±4.50	42.75±5.84	43.18±6.29	—	—	—	2.891 —		
伏臥上体そらし(cm)	52.09±7.66	54.70±9.16	51.17±8.19	—	—	—	2.843 —		
立位体前屈(cm)	10.47±7.75	12.17±6.27	10.63±7.72	—	—	—	1.045 —		
踏み台昇降運動	61.01±11.42	63.06±11.24	65.33±13.41	—	—	—	1.607 —		

表11. 体育授業に対する態度「価値」の程度から見た体力種目平均値の比較

形態項目	(体力診断テスト7種目の群間比較)			(平均±標準偏差)			群間の有意差		
	L群 (n=52)	M群 (n=74)	H群 (n=45)	LM	MH	LH	F検定		
反復横とび(回)	44.69±3.99	45.84±4.48	45.00±4.65	—	—	—	1.152 —		
垂直とび(cm)	59.38±6.15	60.55±5.91	59.39±6.53	—	—	—	0.74 —		
背筋力(kg)	125.60±6.69	125.73±20.60	131.58±28.13	—	—	—	0.933 —		
握力(kg)	41.74±6.48	42.15±4.54	43.12±6.44	—	—	—	0.722 —		
伏臥上体そらし(cm)	52.47±8.02	53.24±8.70	52.76±9.05	—	—	—	0.126 —		
立位体前屈(cm)	11.36±6.75	11.19±7.39	11.08±7.43	—	—	—	0.019 —		
踏み台昇降運動	63.68±13.50	62.88±10.32	63.03±13.06	—	—	—	0.068 —		

筋力、持久力が優れていることが顕著であった。また、各種目のM群とL群間では、反復横とび ($p < 0.01$)、垂直とび ($p < 0.001$)、握力 ($p < 0.01$)、伏臥上体そらし ($p < 0.05$) の4種目で有意な差が認められた。すなわち、「中好意群 (M群)」は「低好意群 (L群)」に比べ敏捷性、瞬発力、筋力 (握力) が優れていることが顕著であった。表10から体育授業の「評価」に対する3群 (「高好意群 (H群)」「中好意群 (M群)」「低好意群 (L群)」) の体力種目の平均値についてF検定の結果、いずれの種目にも有意な差は認められなかった。

表11から体育授業の「価値」に対する3群 (「高好意群 (H群)」「中好意群 (M群)」「低好意群 (L群)」) の体力種目の平均値についてF検定の結果、いずれの種目にも有意な差は認められなかった。

体育不振や体育嫌いの要因として、宇都宮¹⁹⁾は「肥満で体力の劣ること」、兵頭³⁾は「肥満による過体重が体力や運動能力を遅滞させる」など、形態面が体育授業に対する態度に影響していることを指摘している。本研究結果では、体育授業の「価値」因子の好意度によってBMIとの関係がみられたが「よろこび」や「評価」因子では好意度による差異は全くみられず、体育授業に対して「低好意群 (L群)」で過体重や肥満を示す結果は得られなかった。すなわち、形態面が体育不振や体育嫌いと関係するといった先行研究と同様の傾向はみられなかった。このことは、分析方法の相違とも考えられるので今後検討を加えたい。

徳永¹⁶⁾は、「体力低位学生は体育・スポーツに対する好意的態度が低く、課外のスポーツ活動も少なく、消極的性格の学生が多い」と体育授業に対する態度と体力に関係があることを指摘している。今回の結果からも、体育授業での「よろこび」意識が高いと思われる者ほど体力が優れている傾向が顕著に示されたことから、体力の優劣が体育授業に対する態度に影響を与える一要因と考えられる。よって大学における体育・スポーツ授業では、学生の体力を考慮し、体力などの身体的機能が劣っている者でも「よろこび」をもって体育・スポーツに参加できる積極的な工夫、例えば

「より多くの者を、好きな方向へ導く手立て¹⁴⁾、選択授業の自由度、各人の能力水準に合致した授業展開¹³⁾」などの検討が必要であろう。また、本学部学生の場合は同世代の標準的な体力レベルより劣っていることが明らかにされたので、学生の自主性やスポーツ選択の自由度を拡大することも一つの方法であるが、体力低位学生に対しては、積極的な体力養成¹⁷⁾の手立てを講じることも必要と考える。

3) 体育授業に対する態度 (「よろこび」「評価」「価値」) からみた顕在性不安

表12から体育授業の「よろこび」に対する3群 (「高好意群 (H群)」「中好意群 (M群)」「低好意群 (L群)」) 間の顕在性不安6因子の平均値についてF検定の結果、「取り越し苦労」因子のみに有意 ($p < 0.05$) な差が認められた。「取り越し苦労」の各群間の平均値についてt検定の結果、H群とL群間 ($p < 0.05$)、M群とL群間 ($p < 0.05$) に有意な差が認められた。すなわち、体育授業の「よろこび」に対して「低好意群 (L群)」は「高好意群 (H群)」や「中好意群 (M群)」に比べ「取り越し苦労」を強く自覚していた。

表13から体育授業の「評価」に対する3群 (「高好意群 (H群)」「中好意群 (M群)」「低好意群 (L群)」) 間の顕在性不安6因子の平均値についてF検定の結果、「睡眠障害」 ($p < 0.01$)、「取り越し苦労」 ($p < 0.05$) の2因子で有意な差が認められた。有意なF値が得られた2因子の各群間の平均値についてt検定の結果、「睡眠障害」因子のH群とL群間 ($p < 0.05$)、M群とL群間 ($p < 0.01$)、「取り越し苦労」因子のM群とL群間 ($p < 0.01$) に有意な差が認められた。すなわち、体育授業の「評価」に対して「低好意群 (L群)」は「高好意群 (H群)」に比べ「睡眠障害」を強く自覚し、「中好意群 (M群)」に比べ「睡眠障害」や「取り越し苦労」を強く自覚していた。

表14から体育授業の「価値」に対する3群 (「高好意群 (H群)」「中好意群 (M群)」「低好意群 (L群)」) 間の顕在性不安6因子の平均値についてF検定の結果、「身体的症候群」 ($p < 0.05$)、「集中力

欠乏」(p<0.01)、「自信欠乏」(p<0.01)、「睡眠障害」(p<0.05)、「取り越し苦労」(p<0.05)の5因子で有意な差が認められた。有意なF値が得られた5因子の各群間の平均値についてt検定の結果、「身体的症候群」因子のH群とL群間(p<0.05)、M群とL群間(p<0.05)、「集中力欠乏」因子のH群とL群間(p<0.01)、M群とL群間(p<0.01)、「自信欠乏」因子のH群とL群間(p<0.01)、M群L群間(p<0.01)、「睡眠障害」および「取り越し苦労」因子のM群とL群間(各p<0.05)に有意な差が認め

められた。すなわち、体育授業の「価値」に対して「低好意群(L群)」は「高好意群(H群)」に比べ「身体的症候群」「集中力欠乏」「自信欠乏」を強く自覚し、「中好意群(M群)」に比べ「身体的症候群」「集中力欠乏」「自信欠乏」「睡眠障害」「取り越し苦労」を強く自覚していた。

このように体育授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)3因子の好意度から顕在性不安との関係进行分析した結果、態度3因子に共通して授業に対して「好意的な態度が低い者」の方が顕

表12. 体育授業に対する態度「よろこび」の程度から見た顕在性不安因子平均値

顕在性不安項目	顕在性不安6因子の群間比較 (平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定
	L群 (n=57)	M群 (n=67)	H群 (n=55)	LM	MH	LH	
B: 身体的症候群	2.47±1.93	1.90±1.71	1.89±1.85	—	—	—	1.932 —
C: 集中力欠乏	4.26±2.49	3.22±2.06	3.80±2.57	—	—	—	2.955 —
D: 自信欠乏	4.63±2.48	3.87±2.27	3.55±2.45	—	—	—	2.961 —
E: 赤面恐怖	4.65±2.84	4.19±2.80	3.67±2.67	—	—	—	1.709 —
F: 睡眠障害	1.33±1.81	1.15±1.49	1.13±1.25	—	—	—	0.308 —
G: 取り越し苦労	4.42±2.46	3.34±2.43	3.45±2.52	※	—	※	3.346 ※

※:p<0.05

表13. 体育授業に対する態度「評価」の程度から見た顕在性不安因子平均値

顕在性不安項目	顕在性不安6因子の群間比較 (平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定
	L群 (n=51)	M群 (n=75)	H群 (n=53)	LM	MH	LH	
B: 身体的症候群	2.49±2.02	1.85±1.66	2.00±1.84	—	—	—	1.886 —
C: 集中力欠乏	4.27±2.49	3.41±2.48	3.66±2.10	—	—	—	1.991 —
D: 自信欠乏	4.43±2.54	3.71±2.42	4.04±2.38	—	—	—	1.318 —
E: 赤面恐怖	4.65±2.57	3.67±2.89	4.45±2.76	—	—	—	2.242 —
F: 睡眠障害	1.80±1.93	0.95±1.26	0.98±1.28	※※	—	※	5.756 ※※
G: 取り越し苦労	4.39±2.56	3.12±2.27	3.92±2.60	※※	—	—	4.267 ※

※:p<0.05 ※※:p<0.01

表14. 体育授業に対する態度「価値」の程度から見た顕在性不安因子平均値

顕在性不安項目	顕在性不安6因子の群間比較 (平均±標準偏差)			群間の有意差			F検定
	L群 (n=56)	M群 (n=77)	H群 (n=46)	LM	MH	LH	
B: 身体的症候群	2.38±1.93	2.21±1.94	1.51±1.40	※	—	※	3.206 ※
C: 集中力欠乏	4.57±2.55	3.37±2.28	3.32±2.15	※※	—	※※	5.177 ※※
D: 自信欠乏	4.88±2.44	3.67±2.29	3.53±2.48	※※	—	※※	5.282 ※※
E: 赤面恐怖	4.77±2.76	3.87±2.73	3.98±2.85	—	—	—	1.834 —
F: 睡眠障害	1.66±2.10	0.95±1.06	1.06±1.24	※	—	—	3.825 ※
G: 取り越し苦労	4.41±2.44	3.34±2.45	3.51±2.53	※	—	—	3.195 ※

※:p<0.05 ※※:p<0.01

在性不安を強く自覚している傾向がみられた。

体育授業やスポーツ活動に対する好意度が低い学生について、徳永¹⁶⁾は「性格的にも消極的である」とし、佐久本¹³⁾は「適応行動にも何らかの問題を含む状態である」と述べている。また、小川¹²⁾も体育授業に対する「よろこび」の好意度が低い学生は「一般的には消極的とみられるパーソナリティー特性がうかがえた」と述べており、体育・スポーツ活動に対する態度に心理的要因が関与することを明らかにしている。本研究結果でも、体育授業に対する態度(「よろこび」「評価」「価値」)の好意度によって顕在性不安に差異がみられたことから、心理的な行動特性と考えられている顕在性不安も体育授業に対する態度に影響を与えている一要因と考える。

以上のように先行研究や本研究結果でも、体育授業に対する最も基礎的な態度に位置付けられる「よろこび」に対して「好意的な態度の高い者」は体力に優れており、大学での自発的なスポーツ活動にも積極的に参加できるのではないかと思われる。前述したように、小林⁶⁾は、体育授業に対する態度は「よろこび」から「評価」が生まれ、そして「価値観」が育つと指摘している。大学での体育・スポーツ授業が学生にとって真に「価値」のあるものとして位置付けられていくためには、今回の分析結果からみれば、まず、体力の劣る者、顕在性不安が高い者などがいかに「よろこび」を感じられる授業内容にしていくのか具体的な検討の必要性が示唆された。

4. まとめ

大学での保健体育の有りかたを検討する基礎資料を得るために体育授業に対する態度と基礎体力、顕在性不安との関係を分析した結果、今回の結果に限っていえば次のことが指摘できよう。

- 1) 今回対象の学生は日本人の標準的な基礎体力に比べ「背筋力」「握力」「伏臥上体そらし」は有意に劣っていた。
- 2) 体育授業の「価値」に対して「高好意群(H群)」は「低好意群(L群)」に比べBMIが有

意に高かったが、「よろこび」「評価」では好意度によって形態的要因に差異はみられなかった。

- 3) 体育授業の「よろこび」に対して「高好意群(H群)」は「低好意群(L群)」に比べ体力が有意に高かった。「評価」や「価値」では好意度によって体力に差はみられなかった。
- 4) 体育授業の態度「よろこび」「評価」「価値」の3因子に共通して「低好意群(L群)」は「中好意群(M群)」や「高好意群(H群)」に比べ顕在性不安を強く自覚していた。

引用文献

- 1) 穂丸武臣、三井淳蔵：幼児の体格と運動能力の発達, 日本体育学会第49回発表資料, 1998.
- 2) 伴義孝：大学体育の課題と展望, 関西大学出版部, 372, 1986.
- 3) 兵頭寛：肥満児にみられる運動学習の遅滞と不振, 体育科学, 32 (4), 259-262, 1982.
- 4) 林篤：授業分析法入門, 明治図書, 43-59, 1975.
- 5) 小林篤：態度測定に対する体育の授業診断の手引き, 体育科教育, 22 (4), 19-40, 1974.
- 6) 小林篤：体育実技に対する学生の態度の構造と変容, 体育論叢 (II), 54-74, 1970.
- 7) 小林寛道：子どもの体力、運動能力の発達、日本体育学会第49回発表資料, 1998.
- 8) 黒木求, 橋口泰武, 坂入保世：本学部学生の形態と基礎運動能力について, 日本大学理工学部学術講演会講演論文集, 19-21, 1982.
- 9) 中比呂志, 出村慎一：運動習慣の違いが青年期男子学生の体格及び体力に及ぼす影響, 体育学研究, 39 (4), 287-303, 1994.
- 10) 丹羽劭昭：スポーツマンの性格特性, スポーツ科学講座, 大修館書店, 6, 84-107, 1966.
- 11) 大村政男：顕在性不安尺度(MAS)に関する研究-MASの因子分析的研究-, 日本大学人文科学研究, 25, 197-228, 1981.
- 12) 小川貫：体育授業に対する「よろこび」とパーソナリティーの関係, 日本大学理工学部一般教育集報, 67, 45-52, 2000.
- 13) 佐久本稔：運動遅滞者を考える, 運動遅滞者の

運動機構と運動処方, 同文書院, 2-5, 1987.

14) 佐久本稔: 体育嫌いと運動学習の遅滞と不振, 体育の科学, 32(4), 248-252, 1982.

15) 東京都立大学体育学研究室編: 新日本人の体力標準値, 誠信社 406, 1989.

16) 徳永幹雄, 小宮秀一: 体力低位学生の心理的特性とスポーツ活動, 九州大学体育学研究, 4(1), 33-50, 1969.

17) 徳永幹夫, 荒井貞光: 体力低位学生の体育指導

に関する研究, 九州大学体育学研究, 5(1), 9-17, 1973.

18) 上田雅夫: スポーツマンと性格, スポーツ心理学概論, 日本スポーツ心理学会編, 177-205, 1981.

19) 宇都宮護: 中学・高等学校体育における不振児(遅滞児)の実態と指導, 体育の科学, 32(4), 253-258, 1982.

(平成12年12月7日受付)